

「ブーム政党」を考える

—混迷する日本政治を見る一指針として

はじめに

「フレーム政党」とはなにか

本稿が日目の目をみる頃には、衆議院が解散され東京都知事選挙に総選挙が重なり、あわただしい師走が輪をかけて騒々しくなっているかもしない。次期総選挙での台風の目は、橋下徹大阪市長が率いる日本維新の会だとばかり思つていた。ところがここにきて、石原慎太郎都知事の知事辞任と新党立ち上げで、第三極の行方も不透明感を増している。

私や、第二の大都市大阪を預った橋下徹氏にして初めて痛感する中央政治の硬直を国家国民のためにこそ是正する政治を実現しようといふ大きな眼目のための連帯連合を私は提示していふ」と「日本維新大連合」結成を意気込む（石原二〇一二）。

る。そして、それらが生み出される背景、それらに共通する特徴とそれぞれの個性を検討し、最後にそれらが日本政治に与える影響を考えることにする。

果たして、東西の老若の「カリスマ」が有権者の支持を集めて、政治の混迷が続く時代を打ち破るのか。橋下新党の国政進出について「浮ついたブームでなく、しっかりとした中身で既成政党を脅かしてもらいたい」と『日経新聞』の二〇一二年九月九日付社説は書いた。一方、都知事を辞めた石原は、「国運をも左右する都の

1 「フーム政党」はなぜ生じるのか

ある。「小泉劇場」の真骨頂をみせつけられた郵政解散を受けた二〇〇五年九月の総選挙後の調査では、「支持なし」の回答は二五・六%まで低下している。小泉政権以降、それはほぼ三〇%台半ばで推移するが、麻生政権末期の二〇〇九年七月には三七・一%にまで上昇する。ところが翌月末の総選挙直後の九月調査では、「支持な

「チーム政党」の培養士は人びとの既成政党への強い幻滅感である。二〇〇九年八月の前回総選挙では、自公政権を見限つた有権者は民主党に期待を寄せた。これも一種のチームであつたが、有権者の政党支持は既成政党間で移動したのである。ところがいまや、「民主党と自民党に対する不満と失望」が渦巻いている（渡邊二〇一二二三九）。有権者にとって政党の選択肢がない状況にある。

西川伸一
Nishikawa Shin'ichi

し」回答は二四・〇%へと急減したのである。これは民主党が「支持なし」層の獲得に成功したことを示していよう。ちなみに、この調査における民主党の支持率は三四・六%に達していた。自民党は二三・〇%であった。

直近の二〇一二年一〇月調査では、「支持なし」は四五・二%である。二〇一〇年の参院選以降のねじれ国会による「決められない政治」が国民の閉塞感を強めている。清涼飲料水のように「スカッとさわやか」な気分を味わいたいという渴望感に、人びとは満ちている。この層をうまく取り込めば「ブーム政党」として躍進できるはずだ。ところが、今回はじめて選挙肢に加わった日本維新の会の支持率は二・四%にとどまっている。

いずれにせよ、既成政党への不満をためこんだ人びとが「漠然とした神頼み」（中野二〇一二・二一六）の対象を見出したとき、それが「ブーム政党」として大化けする。

「ブーム政党」の指導者像

この「神頼み」の対象となるのは、若くてしがらみのないカリスマ的な指導者である。「ブーム政党」のさきがけである新自由クラブを旗揚げした河野洋平は、當時三九歳であった。日本新党

を立ち上げた細川護熙は五四歳であつたし、日本維新の会を結成した橋下徹は四三歳である。一方、みんなの党結党時の渡辺喜美は五七歳、「国民の生活が第一」結党は小沢一郎が七〇歳になっていた。都知事職を放り投げた石原慎太郎に至っては八〇歳。なにをかいわんやだ。

中でも細川ブームのすさまじさは、「表1」の得票結果に明らかである。中選挙区制による最後の総選挙となつた一九九三年七月の総選挙で、細川は三位以下に大差をつけて当選している。最下位当選者の得票が七万一千票あまりであるから、日本新党はもう一人擁立してもその

候補は十分当選していた。選挙区での政党支持の傾向が議席に反映されていない。これは中選挙区制がもたらす見えない死票である。

「ブーム政党」のイデオロギー

視点を変えて「ブーム政党」のイデオロギー的共通性をみてみよう。それは中道右派あるいは新自由主義である。河野は新自由クラブ結党直後に出了した自著の中で「市場メカニズムに任せることには口をださない」と述べている（河野一九七六年六月）。コメの部分開放を決定したのは細川内閣であつたし、日本維新の会はTPP（環太平洋経済連携協定）への参加を唱えている。

あるいは、「ブーム政党」は少なくとも左派ではない。非左翼という一点だけ共有されれば、「ブーム政党」はイデオロギー的に寛容である。だからこそ既成政党の議員が容易に鞍替えしていく。これに対して、かつて中道左派的な社会民主連合（社民連）が社会党からの離党者らによって結成されたが、支持は広がらずミニ政党にとどまつた。左翼は体質的に非寛容なのだ。

2 「一粒の麦」は実らず

[表1] 1993年総選挙・熊本1区（定員5）開票結果

当	213,125	細川 譲熙	日新	新
当	93,824	野田 毅	自民	前
当	82,620	松岡 利勝	自民	前
当	74,652	田 中 昭一	社会	前
当	71,415	倉田 栄喜	公明	前
△	69,304	魚住 汎英	新生	前
	21,831	野田 将晴	無	新
	11,295	下城 正臣	共産	新

△は法定得票に到達。作成参照：「1997年版政界・官庁人事録」（東洋経済）80頁。

「新自由クラブの挫折

実情だ。」（『朝日新聞』一九七六年六月二六日）
離党届提出に先立つて、彼ら六人は衆参両院

したため、新自由クラブは一八人の衆院議員を擁することになった。

「拍手はいらない」新自由クラブの船出
新自由クラブは、「ブーム政党」を語る際には欠かすことができない。それはどのようにして登場したのか。

一九七六年二月のアメリカ上院外交委員会の多国籍企業小委員会公聴会における暴露証言を発端としたロッキード事件は、同年六月以降東京地検が丸紅と全日空の専務・社長を逮捕するなど深刻化した。三木武夫首相は事件の全容解明を目指すが、自民党内にはそれへの反発が強く「三木おろし」とよばれる派閥抗争が激化する。こうした状況下、河野洋平、西岡武夫、田川誠一ら衆参六人の自民党議員は、同年六月二十五日に中曾根康弘自民党幹事長に離党届を提出した。その際に河野が発表した離党声明「新しい自由主義を求めて」には、国民に満々く既成政党への不満が指摘されている。

「国民党は政治を見放しかけている。『支持政党なし』層の増大が何よりもそれを実証しているが、自民党をはじめ既成の各政党は（中略）危機的状況の進行を放置している。この存亡の危機に立たされた現在もなお、自民党は長老支配のもとで密室的な権力抗争に終始しているのが

には河野が、幹事長には西岡が就いた。河野は新党結成後まもなく刊行した自著の中で、船出の決意をやや悲壮な筆致で記している。

「二十年間、政権を執り続けてきた政党、そしてその党の中でも、私たちは中堅議員としての地位を固めつづりました。しかし、その全てを捨てる決意をしました。先輩は、一日の拍手のために、未来を捨てるのかといいます。しかし、私たちも一日の拍手もいらないのです。どんな拍手も期待をしない。手をたたいていただくよりは、國民に今までと違った目で政治そのものを見てほしい。」（河野一九七六年四月二十四日）

翌一九七七年七月の参院選でも地方区二人と全国区一人の合計三人が当選した。「ブーム」の余韻はまだ残っていた。ミスター円とよばれた元財務省財務官の柳原英資が、新自由クラブから政界進出を狙っていたのはこの頃である（柳原二〇一二年五四）。

一九七八年には国政選挙はなかつたが、自民党総裁選挙が一月に行われ、大方の予想を覆して現職首相の福田赳氏が大平正芳に敗れた。これを受けて、大平内閣が発足する。一方、新自由クラブにあつては、代表の河野と幹事長の西岡との間で路線対立が先鋭化する。中道路線をとり中道野党への配慮をみせる河野に対しても西岡はあくまで保守路線を主張した。両者の対立が解けないまま一九七九年七月に、西岡は新自由クラブを離党する。

これは新自由クラブにとって大きな痛手であった。その年の一〇月に実施された総選挙では、三一人もの候補者を擁立したが、当選者はわずか四人にとどまつた。その後の総選挙での獲得議席は、一二（一九八〇年）→八（一九八三年）→六（一九八六年）と推移する。結局、ブームに乗った初参戦の総選挙での獲得議席を一度も

上回ることはできなかつた。

解党までの路線振幅

一九七九年一〇月の総選挙では、新自由クラブが惨敗したのみならず、自民党も二四八議席と過半数を割り込んだ。その後の首相指名選挙で、新自由クラブは第一回投票から大平正芳に投票する。

第二次大平内閣組閣当初、大平は文部大臣を兼務して、新自由クラブとの連立に固執した。

しかし、自民党内がまとまらずこの構想は頓挫する。ポストを得られずいきり立つ新自由クラブに対して、大平は「一生かけてお返しする」と謝罪したという（河野二〇一二b）。しかし、その「お返し」は翌年に大平が急逝したことで、果たされることはなかった。

自民党との連立に活路を求めた河野は、その失敗の責任を引いて代表を辞任する。後を襲つたのが田川誠一である。一九八〇年六月の衆参同日選で自民同日選で党勢が回復し自民党も大勝したことを受けて、田川は中道路線に舵を切る。一九八一年一月には社民連と院内会派「新自由クラブ・民主連合」を結成し、公明、民社を含めた中道四党の統一会派づくりを目指していく。

だが、この名称の統一確認団体として臨んだ

一九八三年六月の参院選は、敗北に終わる。とりわけ、新自由クラブが選挙資金の大半を負担した比例区で、名簿一位の田英夫社民連代表しか当選しなかつたことは党内に強い不満を残した。そして、年内にも予想される総選挙をにらんで党の独自性をアピールする必要性に迫られ、新自由クラブはこの院内統一会派を解消する（ただし、参院では「新政クラブ」と改称して存続）。

一九八三年二月の総選挙では新自由クラブが議席を三分の二に減らしたのみならず、自民党の獲得議席も過半数に届かなかつた。新自由クラブは再び保守連立に路線を転換させ、代表の田川が第二次中曾根内閣の自治大臣・国家公安委員長として入閣する。その後、内閣改造のたびに山口敏夫が労働大臣として、河野が科学技術庁長官として順次入閣した。

しかし、一九八六年七月の衆参同日選で自民党が衆院で三〇〇議席を得ると、当然のことながら連立は解消された。新自由クラブは前回総選挙よりさらに議席を二議席減らした。この年の終戦記念日が新自由クラブの終戦記念日にもなつた。かつて離党届をつけた中曾根を、河野は首相官邸に訪ねて復党を申し入れたのであつた。ほとんどの議員は自民党に復党した。

田川はそれを潔しとせず進歩党を結成する。

前出の離党声明「新しい自由主義を求めて」は、「私たちの行動が、日本の政治を蘇生させる一粒の麦になるか、させつの道をたどるかは、私たちの研鑽、努力と、国民の支援いかんにかかる」と諷刺つて書いた。一〇年に及ぶ新自由クラブの党史は党勢が停滞する中、生き残りをかけて保守連立路線と中道結集路線の間を揺れ動いた歴史であつた。結果的には、自民党政権の延命に手を貸すことになり、「一粒の麦」を実らせることはできなかつた。

3 あげるべき時に声はあげたが

「短命に終わった日本新党

〔自由社会連合〕結党宣言

細川護熙の母方の祖父は、日米開戦直前に首相を務め軍部の対米主戦論を抑えきれず總辭職した近衛文麿である。保守新党結成を宣言した細川の「〔自由社会連合〕結党宣言」の最後で、細川はこの祖父について言及している。

「歴史家の多くが日米開戦の破局に向かい一つあつた最後の決定的的局面において、私の祖父が『あげるべき声』をあげて軍部の動きを阻止しなかつたことを批判している〔中略〕この批判の当否はともかく、私が歴史の教訓として祖

父自身の悲劇的体験から深く学んだことは、「声をあげるべき時にははつきりとあげなければならぬ」ということである。」（細川一九九二、一〇六）

この結党宣言は一九九二年五月九日発売の『文藝春秋』六月号に発表された。そして新党の名称は、全国から寄せられた六〇〇にものぼる候補案の中から五月二二日に「日本新党」と正式に決まる。「世界の中の『新しい日本』」を創造していくことを表現するのにふさわしい」といいうのがその理由であった（朝日新聞）一九九二年五月二三日）。そして、七月の参院選に向けて比例区での候補者擁立を進めていく。確かに、細川は「声をあげるべき時に」に声をあげたのである。なぜこの時期に声をあげたのか。結党宣言にはこう書かれている。

「最近の世論調査によれば、「支持政党なし」層は再び四五パーセント前後に急増する勢いを見せていて。〔中略〕いわば「支持政党なし」が単独トップの座を占め続けている。つまり、有権者の五割近くが、選択に悩むまともな政党をどこにも見出せないという状態に投げ出されているのである。〔中略〕硬直化、老朽化した既成政党は歴史的巨大な転換に完全に取り残されてしまったのである。／かくして、私と私の同

要の士の前に残されたただひとつの中選挙は、新党結成への道であった。」（細川一九九二、一九八一九九）

まるで先に引いた河野の離党声明を、オウム返ししているかのようみえる。細川もまた既成政党への失望感の蔓延と「支持政党なし」層の急増を強く憂えて、新党結成に立ち上がったわけである。

【第三党】に躍進

このときから翌一九九三年八月の細川内閣成立まで、まさに日本新党ブームが日本を席巻する。まず一九九二年七月の参院選比例区には、一六人の候補者を擁立する。参院議員を一九七一年から二期務めた細川以外は全員新人であつた。結果は四人当選で、共産党の獲得議席に並び民社党の三人を上回った。こうして有権者に認知された日本新党は、その後「風」に乗る。翌年四月に実施された『朝日新聞』の世論調査では、中小政党を大きく引き離して「第三党」に「躍進」した（表2）。回答内訳にある「日本新党色」⁽³⁾は、「支持政党なし」層が日本新党支持へと大きく動いたことを示唆している。

〔表2〕朝日新聞社世論調査結果（1993年4月25, 26日実施）
〔◆あなたは、どの政党が一番好きですか。〕数字は%

	回答	回答内訳
自民	47	自民35・自民色12
社会	17	社会11・社会色6
公明	3	公明3・公明色0
共産	4	共産2・共産色2
民社	3	民社2・民社色1
社民連	1	社民連0・社民連色1
日本新	14	日本新5・日本新色9
支持政党なし	7	
答えない	4	

作成参照：『朝日新聞』1993年4月28日。

現在の首相、官房長官を輩出こうして迎えた一九九三年七月の総選挙では、日本新党は新人ばかり三五人を当選させた（そのうち、細川と小池百合子は参院議員からの鞍替え）。そればかりか、細川を首相にした八党派連立内閣が発足するに至り、ついに五年体制は終焉した。日本新党は「ブーム政党」として特筆すべき歴史的役割を果たしたのである。日本新党の「功績」はそれにとどまらない。同党がこの総選挙で、現在の日本政治で要職をこなしている政治家を初当選させたことは注目

〔表3〕1993年総選挙で日本新党公認として初当選し現在も国会議員である者

氏名	所属(当選回数)	主な要職歴	松下政経塾
荒井聰	民主(衆5)	元経財副大臣	
五十嵐文彦	民主(衆4)	前財務副大臣	
枝野幸男	民主(衆6)	経産相	
小沢銳仁	民主(衆6)	元環境相	
海江田万里	民主(衆5)	元経産相	
鶴下一郎	自民(衆6)	元環境相	
小池百合子	自民(参1・衆6)	前自民党総務会長	
樽床伸二	民主(衆5)	総務相	3期生
長浜博行	民主(衆4・参1)	環境相	2期生
野田佳彦	民主(衆5)	首相	1期生
藤村修	民主(衆6)	官房長官	
前原誠司	民主(衆6)	国家戦略相	8期生
牧野聖修	民主(衆4)	前経産副大臣	
茂木敏充	自民(衆6)	前自民党政調会長	
渡辺浩一郎	新党きずな(衆2)	新党きずな幹事長	

各議員のHPなどを参照に筆者作成。

院に小選挙区比例代表並立制が導入されることになった。ただ、これにより政権の求心力は急速に弱まっていく。加えて、かねてから武村正義官房長官・新党きずな代表と小沢一郎新生党代表幹事の確執が激しさを増し、一方野党自民党が細川の佐川急便からの一億円借り入れ問題を国会で執拗に追及する。これらは細川の政権担当への意欲を着実に失わせ、ついに四月二十五日細川内閣は総辞職する。⁽⁴⁾

続く羽田孜連立内閣では、日本新党からは寺沢芳男参院議員が経済企画庁長官として入閣するにとどまった。羽田内閣成立直後に連立を離脱した社会党に自民党は秋波を送り、社会党委員長の村山富市を担いで自社さ連立内閣が六月三〇日に発足する。日本新党はあわただしく野

に値する(〔表3〕)。いまや首相、官房長官など。いう政権中枢を日本新党出身者が占めているのだ。

与党から野党、そして解党へ

細川連立内閣が発足したのは、一九九三年八

月九日であった。それに先だって、総選挙直後に

党に転落した。

一九九四年一〇月三〇日に日本新党の第一回党大会が開かれた。とはいえ、これは二大政党最大の政治課題は政治改革、もっと端的にいえば中選挙区制に代わる新たな選挙制度を衆院に導入することであった。難産の末、一九九四年

一月に政治改革関連四法案が成立し、衆院に小選挙区比例代表並立制が導入されることになった。ただ、これにより政権の求心力は急速に弱まっていく。

院に小選挙区比例代表並立制が導入されることになった。ただ、これにより政権の求心力は急速に弱まっていく。

加えて、かねてから武村正義官房長官・新党きずな代表と小沢一郎新生党代表幹事の確執が激しさを増し、一方野党自民党が細川の佐川急便からの一億円借り入れ問題を国会で執拗に追及する。これらは細川の政権担当への意欲を着実に失わせ、ついに四月二十五日細川内閣は総辞職する。⁽⁴⁾

続く羽田孜連立内閣では、日本新党からは寺沢芳男参院議員が経済企画庁長官として入閣するにとどまった。羽田内閣成立直後に連立を離脱した社会党に自民党は秋波を送り、社会党委員長の村山富市を担いで自社さ連立内閣が六月三〇日に発足する。日本新党はあわただしく野

に値する(〔表3〕)。いまや首相、官房長官など。いう政権中枢を日本新党出身者が占めているのだ。

細川連立内閣が発足したのは、一九九三年八月九日であった。それに先だって、総選挙直後に日本新党は新党きずなとの衆院院内会派「さきがけ日本新党」を結成している。細川内閣の最大の政治課題は政治改革、もっと端的にいえば中選挙区制に代わる新たな選挙制度を衆院に導入することであった。難産の末、一九九四年一月に政治改革関連四法案が成立し、衆院に小選挙区比例代表並立制が導入されることになった。ただ、これにより政権の求心力は急速に弱まっていく。

加えて、かねてから武村正義官房長官・新党きずな代表と小沢一郎新生党代表幹事の確執が激しさを増し、一方野党自民党が細川の佐川急便からの一億円借り入れ問題を国会で執拗に追及する。これらは細川の政権担当への意欲を着実に失わせ、ついに四月二十五日細川内閣は総辞職する。⁽⁴⁾

続く羽田孜連立内閣では、日本新党からは寺沢芳男参院議員が経済企画庁長官として入閣するにとどまったく。羽田内閣成立直後に連立を離脱した社会党に自民党は秋波を送り、社会党委員長の村山富市を担いで自社さ連立内閣が六月三〇日に発足する。日本新党はあわただしく野

4 大阪発「維新の挑戦」が行きづまるとき ～日本維新の会のジレンマ

全国政党へのハーダル

「一つの大坂」(One Osaka) をキヤフチフレーズに、大阪維新の会が設立されたのは二〇一〇年四月のことであった。代表はタレント弁護士から大阪府知事に転じた橋下徹である。翌二〇一一年四月の統一地方選挙では、そのブームが一気に大ブレークする。大阪府議会の一〇九議席中五七議席を、大阪市議会八六議席中三三議席を、さらに堺市議会の五二議席中

一三議席を大阪維新の会が占めたのである。それら三議会すべてで大阪維新の会は第一党になつた（『読売新聞』二〇一二年四月一日大阪版）。

橋下は同年一月に行われる大阪市長選に立候補するため府知事を辞任し、それを受けて大

阪府知事選と大阪市長選のダブル選挙が実施された。橋下は大阪市長に当選し、同じ大阪維新の会の幹事長である松井一郎が大阪府知事に当選した。地域政党としてまさに破竹の勢いであつた。

こうなると中央政界が放っておかない。支持者が競合するみんなの党が入り寄ってくる。既成政党を離党し維新の会から次の総選挙は出たいと考える議員も後を絶たない。橋下自身は国政への転出を強く否定しつつも、大阪維新の会は全国政党へと歩を進めていく。その際大きな条件をクリアする必要があった。公職選挙法上の政黨要件を満たすことである。

同法の規定では、(1) 所属の国会議員が五人以上、(2) 直近の国政選挙における得票率が二%以上、のいずれかの要件を満たした政治団体が政党として扱われる。そうなると、衆院選の小選挙区と比例区の双方への重複立候補が可能となる。小選挙区での政見放送も認められ、政党

交付金の交付対象にもなる（厳密にいえば、政党交付金の交付対象となる政党は政治資金規正法上の政治団体であつて、上記要件(2)に「所属」が一人以上」が加わる）。

そこで、既成政党からの鞍替え議員を五人以上募ることがまず求められた。

「排除の論理」は取らず

この際、鳩山由紀夫が一九九六年に旧民主党を結成するにあたって用いた「排除の論理」は取られなかつた。鳩山は旧民主党の清新さとアイデンティティを明確にするために、新党さきがけの武村や社会党の村山の参加を拒否したのである。そして、鳩山と菅直人を共同代表として旧民主党は出発する。その後、与党へのし上

がつた同党の党勢拡大を見るに、結党時の「排除の論理」は妥当な戦略であったと考えられる。一方、大阪府議会議長にして日本維新の会政調会長である浅田均は、二〇一二年七月のインタビューで「既成政党と手を組む考ははないですか」と問われて、次のように答えている。ちなみに、浅田は「維新の知恵袋」として知られ、その政策集である「維新八策」の起草者といわれている。

「事前にどこかの党と手を組むということは

考えておりません。大阪、日本の停滞を憂い、打破する政策に賛同してくれる方ならば、どなたとも手を組みます。政策を実現させるという志を同じくすることが大前提です。」<http://diamondjp/articles/-/21130>（二〇一二年一〇月二六日閲覧）

もちろん政策実現は重要だが、そのためには安易な数あわせに走ると、新党としての魅力は半減する。二〇一二年九月一、二日に産経新聞とFNN（フジニュースネットワーク）が実施した合同世論調査では、「いま衆院選が行われるとしたら、比例代表でどの政党、政治団体に投票したいか」の回答で、「大阪維新の会」がトップの二三・八%だった（『産経新聞』二〇一二年九月四日）。

これが、民主・自民などからの鞍替え議員を迎入れ、九月二八日に全国政党「日本維新の会」を正式発足させたあとはどうなつたか。同じ合同世論調査が一〇月六、七日に実施された。それによれば、全国政党化に伴いはじめて調査対象となつた日本維新の会の政党支持率は七・七%の三位にとどまつた。また、前回調査でトップだった次期衆院選比例代表投票先でも、日本維新の会は一四・二%へと前回（「大阪維新の会」で調査）から急落し、やはり三位に甘んじること

とになった（『産経新聞』二〇一二年一〇月九日）。

今回の調査には、「民主党や自民党に離党届を提出した複数の国會議員が日本維新の会に合流したが…」という設問も用意されていた。回答の選択肢から「好意的にみている」を選んだ者が二三・〇%だったのに対して、「批判的にみている」は六一・〇%であった。

有権者は鋭く本質を見抜いている。既成政党から議員を吸収することで、日本維新の会がそれまでの「らしさ」を喪失し、既成政党化への道を歩み出したことを有権者は敏感に察知したのである⁽⁵⁾。かつての新自由クラブや最近の「国民の生活が第一」のように、單一の既成政党からの集団離党者が政党を設立したのであれば、有権者に受け入れられやすい。結党の理念が明確だからだ。しかし、様々な政党から離党した議員の寄せ集めでは、政党要件クリアのためのご都合主義と映じてしまう。

独自路線は取り得なかつたのか

大阪ダブル選挙をピーコクに、もはや維新のブームは去った感すら漂う。このままでは、石原新党、みんなの党との第三極結集の主導権争いに、日本維新の会は翻弄されてしまいそうであ

る。

あくまで結果論でしかないが、大阪発「維新の挑戦」の金看板にこだわって、他の政党とは手を組まずに独自路線を貫いたほうがよかつたのではないか。既成政党からの鞍替え議員を迎える入らずに、かつての日本新党のように新人候補ばかりで総選挙に臨む戦略もあったように思う。

もちろん、それでは政党要件をクリアできず選挙運動に大きな制約がかかる。だがむしろ、この「参入障壁」の不当性を声高に訴えることで、既成政党の既得権を批判して民意をつかむことができたのではないか。既成政党ではないことが、維新の会の最大のセールスポイントだったはずだ。

全国政党としての地位確立を急げば、立党のアイデンティティが揺るぎ支持者が離れる。とはい政党要件をクリアしなければ総選挙が戦えない。このジレンマのために日本維新の会は伸び悩むことになった。

日本維新の会の個性的な規約

日本維新の会の規約⁽⁶⁾をみると、確かに既成政党との違いが際立っている。他の党の規約・党則の場合、共産党以外は第一条で「東京都に本

部などを置く」と譲つている。なぜか共産党だけは本部の所在地の規定が規約にない。これに對して、日本維新の会では、第一条で「大阪府に本部を置く」としている。

また、第五条で最高議決機関として「全体会議」を設置している。他党でいえば党大会に当たる。興味深いのはその第四項で「全体会議は、執行役員会の議を経て、代表が招集する」としか規定していない。全体会議を招集する権限は代表にしか認められていないのである。他党の場合には代表が招集する規定に加えて、「代表は、両院議員総会が議決によつて要請した場合は、大会を招集しなければならない」（民主党規約第六条）などと、もう一つの招集ルートを必ず定めている。⁽⁷⁾

その上、第一二条で「衆議院議員選挙、参議院議員選挙、首長選挙、地方議員選挙の候補者はいえ政党要件をクリアしなければ総選挙が戦えない。このジレンマのために日本維新の会は表が決定する」としているのも特異である。その第二項で衆参の比例代表選挙の名簿順位についても、代表に最終的な決定権が担保されている。こうした規定は他党ではみられない。

すなわち、代表しか全体会議を招集できず、選挙の候補者選定の権限は代表に集中しているのである。代表、すなわち橋下大阪市長に強い

権限が与えられている。

橋下は国政転出を何度も否定している。もし、日本維新の会の国会議員が首相に就任することになれば、日本国首相が橋下大阪市長にお伺いをたてるため來阪する事態となろう。あるいは国会議員が代表に就けば、その者は地元と国会のある東京と党本部のある大阪の三重生活を強いられる。いずれも非現実的といわざるをえない。橋下代表を前提につくられた規約だからこうなるのだ。やはり、橋下商店なのである。

むすびにかえて

政治的触媒効果

政治学者の岡野加穂留は、かつて次のように書いている。

「既成政党に魅力のないことは明らか。それならば、新自由クラブはどうか。これは、本来、政党にそのままなりうるグループではなく、政治的触媒機能の集団であると私は考える。(中略)政界再編成のための「活性化工エネルギー」である。(中略)政治の即効薬の効果を意図したつけ焼き刃的発想が、ポンポンと、よどみなく飛びだしてくる。私は、そのこと自体を非難はしない。つまり、非難の対象になりうることすら、既成政党の「老害化」した官僚主義的発想

屋の政治家からは、アイディア一つでこない

からである」(岡野一九八一二一八三二一八四)触媒とは本来化学用語だが、ある状態を変化させたり、何かを生み出すための刺激となったりする物を指す場合にも用いられる。新自由クラブに限らず、日本新党にせよ日本維新の会にせよ、これらが岡野の指摘どおり、「政界再編成のための活性化工エネルギー」を日本の政治に注入したことは間違いない⁽¹⁾。日本新党にはもつともそれがあつてはまる。

既成政党が有権者の信頼を失い「支持政党なし」層が急増する時代に、「ブーム政党」が登場して「政治的触媒機能」を果たす。今後もうした現象が繰り返されよう。とはいへ、これまでの三党の盛衰の検討から、「ブーム政党」が触媒的存在を超えて、日本政治に定着することは困難であると考える。カリスマなくして「ブーム政党」はありえず、やがてカリスマは飽きられる。すなわち、「政治リーダーを創り上げる」パワーが、すぐに政治リーダーを追い落とすパワーになってしまう」(河上二〇一二一九八)のである。

究極の「ブーム政党」はヒトラーのナチスであろう。それを許さない民意の「飽きっぽさ」をここではむしろ肯定的に捉えたい。現代の「政治家の消費財化」(遠藤二〇〇一・一六)は悪いことばかりではない。「幽靈の正体見たり枯れ尾花」という。オオカミ論に陥ることなく、「ブーム政党」は正しく恐れるべきだ。その指導者を「奴の本性」などと蔑み、それを「解説」するために、「両親」や「ルーツ」を「できるだけ詳しく調べあげ」るとして下劣な表現を重ねる(佐野ほか二〇一二二二)。この「醜悪さ」のほうこそ、私は「正視」できない。

(注)

(1) NHK放送文化研究所は政治意識月例調査として、内閣支持率と政党支持率を調査

している。これは全国二〇歳以上の男女を対象とした電話法(RDD追跡法)によるもので、毎月上旬に実施される。回答数は毎回一〇〇〇人程度、回答率は六五%前後である。一九九八年からの調査結果は次のHP上で閲覧可能である。<http://www.nhk.or.jp/bunkensyoron/political/index.html>

(2) ただし、河野が「この党に居場所がないと思った」のは、三木武夫總裁下で迎えた立党二〇周年を機とした新綱領作成に携わって挫折したときであった。その作成作業の小委員長だった河野は、「綱領〔正確には政綱〕から自主憲法制定の一歩を削つたらどうか」と

■西川伸一 「ブーム政党」を考える

- (3) 「この政党支持の質問では、「好きな政党」がない人や答えなかつた人に「好き、きれい」と重ねて質問して得た回答から「政党色」を出し、「好きな政党（比較的強い支持）と「政党色」（比較的弱い支持）を合わせて、各政党の支持率とした。」
- (4) 細川の日記によれば、彼が辞職を決意したのは四月六日である。その決意をまず小沢に電話で伝えていたのが、細川政権の眞の権力のありかを暗示しているよう。その日の日記の最後には「あやまちも失敗も多かつた」だが、後悔する余地はない」というヘルマン・ヘッセの言葉が引かれている（細川二〇一〇・四七四—四七五）。
- (5) 日本維新の会が支持率を急落させたもう一つの原因として、正式発足直前の日本維新の会第二回政策討論会（九月二三日）で、橋下が竹島（韓国名・独島）の日韓共同管理を唱したことを見逃せない。
- (6) 規約全文は

発言したところ、党内タカ派の青風会に伝わり、彼らから猛反発を受けた。そして、河野が小委員長の辞表を提出する事態にまで至った（河野二〇一二-a）。

(3) 「この政党支持の質問では、「好きな政党」

がない人や答えなかつた人に「好き、きれい」と重ねて質問して得た回答から「政党色」を出し、「好きな政党（比較的強い支持）と「政党色」（比較的弱い支持）を合わせて、各政党の支持率とした。」

(7) 民主党以外では、自民党政局第二十七条、「国民の生活が第一」規約第一四条、公明党政局第六条、共産党政局第一九条、および社民党政局第七条に、もう一つの招集ルートがそれ規定されている。

(8) 日本政治の用語をめぐっては、「ブーム政党」は確かに「活性化エネルギー」になっている。政党の党首を代表とよんだのは新自由

クラブが最初であり、いまでは多くの政党がこの呼称を採用している。また、政党名に新党をつけたのは日本新党がはじめてで、その後後の筋のように新党を名称に冠した政党が生まれた。

http://digital.asahi.com/articles/OSK201209280153.html?ref=conkii_redirect
で読むことができる（要会員登録）。

河上和久（二〇一二）「橋下維新」は3年で終わる」宝島社新書。
河野洋平（一九七六）「拍手は知らない」PH P研究所。
——（二〇一二-a）「時代の証言者 保守・ハト派 河野洋平（9）」「読売新聞」二〇一二年九月二七日。

——（二〇一二-b）「時代の証言者 保守・ハト派 河野洋平（12）」「読売新聞」二〇一二年一〇月一日。
榎原英資（二〇一二）「財務省」新潮新書。
佐野真一ほか（二〇一二）「ハシシタ 奴の本性」「週刊朝日」二〇一二年一〇月二六日。
「冷めてきた「橋下ファイバー」」（二〇一二）「選択」二〇一二年一〇月号。

中野雅至（二〇一二）「財務省支配の裏側」朝日新書。

細川護熙（一九九二）「自由社会連合」結党宣言」「文藝春秋」一九九二年六月号。

——（二〇一二）「内訌録」日経新聞出版社。

石原慎太郎（二〇一二）「日本よ 真の大国とは何か」「産經新聞」二〇一二年一月五日。

遠藤浩一（二〇一二）「消費される権力者」中央公論新社。

岡野加穂留（一九八二）「政治の舞台」ぎょうせい。

- （引用・参照文献）
浅川博忠（二〇〇五）「新党」盛衰記 講談社文庫。
石川真澄（二〇〇四）「戦後政治史 新版」岩波新書。
石原慎太郎（二〇一二）「日本よ 真の大国とは何か」「産經新聞」二〇一二年一月五日。
遠藤浩一（二〇一二）「消費される権力者」中央公論新社。
岡野加穂留（一九八二）「政治の舞台」ぎょうせい。